

超高齢社会の課題を見据え、新たなビジネスの創出に挑む「プロジェクトCHANGE」。川崎市産業振興財団ナノ医療イノベーションセンター(iCONM)を中心に進むこのプロジェクトが着目するのは「看護の現場」だ。超高齢社会に突入し、在宅看護のニーズは高まるばかりだが、看護は人手や経験に頼るものとの固定観念から技術革新は遅れがち。現場目線で工学を融合し、企業誘致も進めながら看護分野を成長産業へと変えていく。

新たな事業を創出する ケアイノベーション

(下)



超高齢社会、技術で支える

現場の厳しさを知った。病院では患者に適切なケアを24時間行えるが、地域医療ではそれができない。家族あるいは本人がやらなくてはならないのだが、素人でも使える道具や知識がない。

「医療の中で最も負荷がかかるのは看護や介護だが、工学研究者から見ると看護師さんはまるで丸腰」。プロジェクトを統括する一木隆範東京大学教授は川崎市看護協会との意見交換で



労働環境改善を担当する篠山薫理事(川崎市立井田病院副院長兼看護部長)は現場の窮状を訴える。

「このような実態と反し、高齢化により病院での治療を必要とする急性期の患者が増え、病床確保のため回復期に入った患者は退院し、外来または在宅での療養に委ねられる傾向にある。現場での困り事は毎日毎日起こっていてインシデントにも繋がりがねない。看護師の数も限りがあり、もう一人の手だけでは難しい」と、川崎市看護協会

は命を預かるという精神的負担も大きい。誰かが支えなきゃならない」と看護のイノベーションを目指す。

「天と地ほどの差がある」。工学の医療応用に取り組んでいる、iCONMの神田循大研究員はシャドローイングを経験してこう話す。「看護現場を体験し、誰がどの場面でのよう

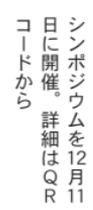
看護×工学で新産業創る

研究者目線で考えていた今までのアイデアは根本から見直す必要があることに気づかされた。

「当たり前のようになくなってしまった日常業務を別の視点で観てくれることはとても有難い(篠山氏)」。こうしたアプローチは工学分野で「ヒューマンセンタード」(人間中心の設計・開発)と呼び、様々な製品開発に活かされている。これまで、この手法を持ち込める看護の現場がなかったが、川崎市看護協会の協力を得ることができ、トライアルが始まった。

「天と地ほどの差がある」。工学の医療応用に取り組んでいる、iCONMの神田循大研究員はシャドローイングを経験してこう話す。「看護現場を体験し、誰がどの場面でのよう

シンポジウムを12月11日に開催。詳細はQRコードから



について述べる予定。